

〔書評〕

Mark A. Noll, David W. Bebbington, and George A. Rawlyk, eds.,  
*Evangelicalism: Comparative Studies of Popular Protestantism  
in North America, the British Isles, and Beyond, 1700–1990*  
(New York and Oxford: Oxford University Press, 1994), 430 pp.

増井志津代

本書は、イエール大学で現在アメリカ宗  
教史を担当するハリー・スタウトを総編集  
責任者としてオックスフォード大学出版  
より刊行されている『アメリカの宗教シ  
リーズ』の中の一巻である。1992年4月8日  
から11日まで、イリノイ州ホイートン・カ  
レッジで開催された会議「環大西洋的視  
点におけるエヴァンジェリカルイズム」  
で発表された論文を中心にまとめられ  
た研究書で、英米における近年のエ  
ヴァンジェリカルイズムに関する歴史  
研究の成果を概観する為には有益な論  
文が多く収められている。

本書の編集者、また執筆者でもあるマ  
ーク・ノール、デイヴィッド・ベビン  
トン、ジョージ・ローレクはそれぞれ、  
アメリカ、イギリス、カナダの各大学  
で教鞭を取る宗教史の専門家である。  
編者を三地域より立てた背景には本  
書のタイトルが示すようにエヴァン  
ジェリカルイズムという歴史的運動を  
一国内で成立した運動というより、大  
西洋を中心とした旧英領三地域を結  
ぶ、文化交流のダイナミズムの中で  
捉えようとする編集者側の意図があ  
る。実際、国別、あるいは特定の教  
派別のエヴァンジェリカルイズム  
研究はこれまでに多くなされてきて  
いる。

この本のねらいは、環大西洋のコン  
テキストに焦点をあて、運動の相互関  
係を地理的、歴史的に探ることによ  
って、福音主義運動の全体像を浮か  
び上げさせることにある。旧英国領  
各地域間相互の比較研究に力点を  
置き、ケーススタディを多く収める  
ため、各論文の著者もアメリカ合衆  
国7名、カナダ4名、イギリス7名  
(内イングランド4名、スコットラ  
ンド2名、北アイルランド1名)、  
オーストラリア1名と英語圏各地  
域にまたがって集められている。ま  
た、論文の執筆者には、単に担当地  
域、あるいは人物についての特定の  
研究に止まるのではなく、それぞれ  
取り扱うテーマ、運動、論争の内容を  
少なくとも二つ以上の地域にまた  
がらせて考察することが課題として  
与えられている。

ここで編者の意味するところの「エ  
ヴァンジェリカルイズム (Evangelical  
ism)」という用語について説明を加  
えておきたい。エヴァンジェリカル  
イズムは、通常、「福音主義」と訳さ  
れる主としてプロテスタント内部の  
信仰的立場として理解されるが、ル  
ターの宗教改革以降、様々なグル  
ープにより多様な定義がなされて  
きた。本書におい

ては、18世紀イギリス本国と、大西洋を隔てた英領植民地で起きたプロテスタント内部の信仰刷新運動、第一次信仰覚醒 (The First Great Awakening) をエヴァンジェリカリズムのルーツと規定する。この運動はさらに19世紀、より大規模な第二次覚醒運動 (The Second Great Awakening) を経て、プロテスタント諸教派の積極的な海外宣教活動を生みだし、英語圏以外の地域へと地理的な広がりを見せていく。編者のひとりでもあるペビンソンはこの、発生的にイギリス、民族的にはアングロサクソンを中心とする福音主義の特徴を、「聖書中心主義 (biblicism)」、「回心主義 (conversionism)」、「実践主義 (activism)」、「十字架中心主義 (crucicentrism)」の4強調点を掲げて説明する。すなわち、聖書を究極の信仰的権威とし、新生 (New Birth) を強調し、信仰の個人的実践と社会的責任を説き、十字架におけるキリストの贖罪をキリスト教の真髄とするプロテスタント内部の人々が福音主義運動の歴史的担い手と理解される<sup>9)</sup>。

こうした4つの強調点を持つエヴァンジェリカリズムの起源を18世紀にたどってみると——ロンドンをはじめとする英国の商業都市、スコットランドの高および低地方、ウェールズとアイルランド、そして北アメリカの三植民地の人々は、天才的大衆説教者ジョージ・ホイットフィールド、精力的な福音伝道者ジョン・ウェスレー、北アメリカ史上最も優れた神学者とされるジョナサン・エドワーズの三名の指導者に導かれた宗教的「覚醒」をそれぞれの地域で、ほぼ同時期に経験した。アメリカ独立革命直

前のこの時代、英国とその植民地は多くの印刷物、頻繁な書簡の交換のコミュニケーションネットワークにより政治社会的、文化的に緊密に結び付けられていた。たとえば、植民地ニューイングランド、ノーサンプトン教会の教会員アビガイル・ハッチンソンが「キリストの血がすべての罪をきよめる」という趣旨の説教を聞いて経験した「キリストに対する新たな思い」と「大きな喜び」は教区牧師ジョナサン・エドワーズの記録した植民地の教会についての報告書によりただちに英国に伝えられた<sup>10)</sup>。またウェスレーを中心として起きたロンドンでの覚醒も、ホイットフィールドのスコットランド、グラスゴーにおける大衆伝道の働きもこの環大西洋的な英語圏情報ネットワークによりまたたく間に各地に伝えられたのである。

大西洋地域の英語圏における福音的覚醒運動、ことに第一次覚醒運動の強調点の多くは、決してそれ自体新奇なものではなく、大陸ヨーロッパの伝統的プロテスタンティズムの歴史に連動するものである。また、エドワーズがしばしば最後のピューリタンとして挙げられるように、殊に16世紀イングランドにルーツを持つピューリタンのカルヴァン主義的信仰運動、その信条の大部分、教会実践、行動様式を継承する。このように、伝統的プロテスタンティズムの信仰を継承しつつも、18世紀の英国領における福音的覚醒運動は、それ以降のプロテスタンティズムの性格を決定づける、特異な強調点を生み出したと編者等は主張する。

本書における福音主義へのアプローチは、ほとんどの論文の著者が歴史家である

ということもあり、この運動の基本的教えやエヴァンジェリズム（福音の宣伝努力）についてではなく、トランスナショナルなダイナミズムにより、福音主義者が、どのようにその信条、実践、組織、伝達的手段を形成していったか、変化する文化状況にいかに応答し、かつ、イデオロギー論争にどう関わっていったかという事実の歴史、文化、社会的分析となっている。すなわち、「ホイットフィールド、ウェスレー、エドワーズ」といった名称によって代表される18世紀から、「ピリー・グラハム、IVCF、ジョン・ストット」といった名称に代表される今世紀まで、福音主義が、イギリス、アメリカ、カナダを中心としたネットワークの中で、いかに発展かつ変容して来たか、運動の相互関係性を分析することをねらいとしている。こうした歴史、社会分析的な福音主義へのアプローチは、福音主義の運動が何故定義しがたいかという理由をも再確認させてくれる。エヴァンジェリカルイズムは本来、覚醒運動という動的な要因に促されて形成されてきた流動的なムーブメントであり、固定的、かつスタティックな定義は歴史上のどの時代においても困難なのである。福音主義は、前述のペイントンの定義であげられるような共通要素を大枠として持ちながら、時代によりまたその地域的な状況により様々に変容し強調点を変えてきた多様な運動だといえよう。そうした運動の多面性をも認識しつつ、エヴァンジェリカルイズムの各地域における歴史的、社会的影響関係を分析するのが本書の論文寄稿者達の共通した作業になっている。

ここで、編者等が一応の合意点として共

有しているエヴァンジェリカルの歴史に関する見解を4項目挙げておこう。

まず第一の共有見解は、福音主義は非常に複雑な現象だという認識である。18世紀、発生期から、エヴァンジェリカルイズムは常に多様で、変容しやすく、異なった形態を取ってきた。例えば、政治との関係を見ても一貫性はない。地域、時代によって、保守政治ともまた非常にラディカルな政治とも結びついてきた。

第二に、福音主義は常にポピュラーな、民衆運動的特徴により規定される。ナサン・ハッチの著書『アメリカ宗教の民主化』(*Democratization of American Christianity*, 1989)で詳しく論じられているように、英語圏の福音主義の特徴は一般民衆の運動であるという点である。これには、長所と短所と、両面が伴うが、短所としては、そのポピュリズム故、カリスマ性や組織運営能力を持つ人物が伝統的権威を個人的なものとする替え、独断的な指導性を発揮するといった形をとることがある。しかし、大概において、福音主義者は伝統的な宗教改革以来の伝統を守りながら、刷新的な面をも切り開いて来たと判断される。

第三として、福音主義者はしばしば伝統主義の批判、改革者とされるが、実際面では伝統主義的である。例えば、20世紀、ペンテコステ派やカリスマ運動の人々に伝統的プロテスタントの側が用いる「熱狂主義者 (enthusiast)」という批判は、18世紀、ジョン・ウェスレーが同時代人に受けた批判に類似している。また、聖書のみをエヴァンジェリカルズのための唯一の教義とするといった極端な聖書崇拜主義は、福音主義でも

特に保守的なグループの強調点である。しかし、そうした立場から出される聖書解釈や教えを検討すると、より伝統的なグループにおけるリタジーや説教形式以上に硬直化していることが多々ある。伝統よりも個人の信仰体験を重視し、「新しい」ものを追い求める傾向を持つかに見える福音主義は、実際、その構成メンバーが意識する以上に伝統の反復をしているのである。

第四。その歴史のはじめから、革新的なコミュニケーションのネットワーク利用がエヴァンジェリカルイズムに超国家的な性質を与えてきた。福音伝達のために登場した様々なファクター（例えば聖書協会のようなヴォランティア団体、ジョージ・ホイットフィールドやビリー・グラハムのような大衆説教家、書籍、雑誌、賛美歌）が、国家の境界を超えて、北大西洋地域におけるエヴァンジェリカル固有の表現形式を、引いては全世界に伝播される形式を形作って来た。以上、四点が編著者等の福音主義に関する共通見解である。

さて、本論は、エヴァンジェリカルイズムの多様な展開を歴史的にたどることができるよう、五部構成になっている。第一部、運動の「発芽期 (Origins)」に関して五論文が、第二部「革命期 (The Revolutionary Era)」に三論文、第三部「19世紀エヴァンジェリカル・カルチャー (Nineteenth-century Evangelical Cultures)」に四論文、地域的な特徴を考察した三論文が第四部に、そして第五部「20世紀 (The Twentieth Century)」には四論文がそれぞれ収められている。ここでは、最も多くページ数の割かれている第一部について特に紹介する。

第一部の「発芽期」五論文に共通するのは、福音主義は18世紀、その原点において、国際的、汎プロテスタント的な広がりを持つ運動であったとの見解である。例えば、ジョン・ウォルシュによると、第一次覚醒運動の3人の中心人物、ホイットフィールド、ウェスレー、エドワーズの内、前者2名は、ロンドン、ボストン、スコットランド、ウェールズ、フィラデルフィア、サウスキャロライナと大西洋を越え、自由な伝道旅行を続けた。また、この時代のアングロプロテスタンティズムに多大な影響を与えたドイツ敬虔主義の中心人物、ハレのA. H. フランケが手紙を送った相手は約5,000人、定期的な文通相手はざっと300人から400人を数えたという。こうした国境を越えた汎プロテスタント・ネットワークにより、イングランドの非国教徒、ニューイングランドの清教徒、スコットランドの長老主義者達は緊密に結びつけられていたのである<sup>9)</sup>。

1740年代は、廉価な一文雑誌の登場により、出版業界に変革の起きた時代でもある。スーザン・オブライエンの論文によると、大西洋を往復する私的な書簡のやりとりは、やがてより大きなメディア、福音主義者により次々に刊行された雑誌や新聞に取って代わられる。リバイバルに関する書簡や「驚くべき御業」に関するナラティブは直ちに印刷され、広範囲に渡って配布され、市場に流通することになったのである。このようにして、「契約、回心、新生」という共有概念の行き渡ったプロテスタント文化圏全域に、リバイバルの言説が流布され、環大西洋的な福音主義のサブカルチャ

ーが形成された<sup>6)</sup>。

18世紀における産業構造の変化と都市の発達、および、大規模な市場の登場とリバイバルの関係はハリー・スタウトの論文の主眼点でもある。ジョージ・ホイットフィールド伝の著者でもあるスタウトは<sup>6)</sup>、本書の論文では、ロンドンという当時の商業の中心地から始まったホイットフィールドの伝道活動を市場で流通する商品としての福音説教への観点から説明する。

ホイットフィールドの大衆伝道は、この後20世紀まで続くアングロ・アメリカの福音伝道のパラダイムを決定した。教会の建物の内部に止まらない、多くの人々を集められる屋外での集会、安息日以外の日の説教、原稿を用いないでその場の聴衆に合わせて語られる即興での説教、そしてひとつの場所にこだわらない巡回伝道という、それまでの形式を打ち破ったホイットフィールドのマス・エヴァンジェリズムの方法は後のリバイバルリストに範を提供した<sup>6)</sup>。

従来ピューリタンの説教法に乗っ取ったジョナサン・エドワーズの淡々とした、周到なノートを手にしての説教とは異なり、もともとオックスフォードの学生時代から演劇に関心の強かったホイットフィールドは、講壇を一種の聖なる劇場 (sacred theater) とし、説教を熱のこもった、ドラマチックなパフォーマンスとして聴衆に見せ、また聴かせたのである。宗教的言説は、ホイットフィールドの登場により、大衆のための娯楽的要素が加えられ、福音説教はカルヴァン主義的文化を共有する国際市場で頻繁に出回る人気商品となったのである。大衆化された福音は、その後、フィ

ラデルフィア、ニューヨーク、ボストンと新大陸の大西洋岸大都市へ、ホイットフィールドにより伝えられ、やがて彼のパフォーマンスを模す、にわか仕立てのリバイバルリストにより内陸の辺境へともたらされることになる。植民地全域で大変な人気を博したホイットフィールドはアメリカ最初の文化的英雄 (cultural hero) とも言え、この時代のもうひとりの寵児、ベンジャミン・フランクリンの関心を引いたのはこの説教家のパフォーマンスの才能でもある。カルヴィニスト、アルミニアン双方に受け入れられた最初のパラチャーチ活動、「新生」経験の強調、ヴォランティアズム、娯楽性、大衆性といった後のアングロ・アメリカのプロテスタントの特色を決定づけるエヴァンジェリカルな宗教形態は、歴史的には、天才的エンターテナー、ホイットフィールドにより生み出されたといっても過言ではない。エドワーズの学究型の伝統よりもホイットフィールドのパフォーマンスの伝統が後世の、特に北アメリカの福音主義者達には継承されることになる。

デイヴィッド・カリーの論文は、エヴァンジェリカルの相互交流をジョン・コットン、リチャード・マザーといったふたりの第一世代ピューリタンを祖父に持つ17世紀後期の代表的ピューリタン、コットン・マザーとハレのA. H. フランケとの文通による親交にまで遡る。18世紀、ベンジャミン・フランクリンに影響を与え、アメリカのピューリタニズムを世俗化させ、人道主義的モラリズムとプラグマティズムへと変容させる要因となったとされるマザーの『善行録』 (*Bonifacius: Essays to Do Good*)

は、ガリーの研究によると、ドイツ敬虔主義の社会的なアクティビズムの影響を受けたものだという。1702年にアングリカンのジョセフ・ダドレーを植民地の総督に迎えさせられたニューイングランドのピューリタン共同体は、ピューリタニズムの路線保持の為の新しい方策を探していた。その中で、フランケとの文通によりマザーが学んだのが、ドイツ敬虔派の「慈善」に対するアプローチだった。慈善活動への傾斜は、特に、19世紀後期、福音主義運動の強調点として再びあらわれる。この意味で、キリスト者と善行の関係にいちやく目を止めたコットン・マザーは、後の福音主義者のプロトタイプとみなされる<sup>7)</sup>。

「革命期」を扱った第二部には、特に宗教と国家の問題に関する論文が収められている。第三部は19世紀、福音主義が最盛期を迎えた時代でもあり、いわば、そのアイデンティティの確立期についての論文で構成されている。たとえば、反カソリズム、スコットランド常識哲学の強い影響、プレミレニアリズムといったこの時代に福音主義に加えられた特色についての詳しい分析がそれぞれなされている。20世紀はじめにおけるファンダメンタリズム<sup>8)</sup>への傾斜の予兆をたどるのに役立つ論文が多い。第四部は、宣教活動による福音主義のひろがり、例として、オーストラリア、アフリカにおける展開についてのケース・スタディが収められている。

第五部の20世紀に関する論文の中では、19世紀の福音主義プロテスタンティズムが、特にアメリカにおいて、1920年代、ファンダメンタリストとモダニストの二つの

グループに決裂していく過程が詳しく分析されている。両グループへの分裂は、デイヴィッド・ベピントンによると、英語圏では特にアメリカにおいて20世紀初頭、決定的なものとなる。ファンダメンタリズムと結びつけられる要素を拒否する傾向を持ったイギリスの福音派とは異なり、歴史的にファンダメンタリストを内部に抱え込むことになったアメリカの福音派プロテスタント教会はモダニズムへの反発がもたらした極端な反理性主義、神学教育の低迷、デイスペンセーションナリズムの強い影響、聖書の無誤性 (inerrancy) に関する論争等、19世紀の福音主義においては周辺的にしか存在しなかった数々の問題と長く取り組むことになる<sup>9)</sup>。1976年ジミー・カーターの政治の舞台への登場で脚光を浴びることになったカール・ヘンリー等により推進された「ネオ・エヴァンジェリカルイズム」の刷新の動きは、しばらくメディアの好意的な注目を浴びたが、1970年代の終わり頃登場したジェリー・ファルウェルの「モラルマジョリティ (Moral Majority)」に代表される政治的宗教右翼の活動激化に伴い1980年代、再びイメージ的な打撃を受けることになった。福音主義的社会政治活動はたとえば「ソジョナーズ (the Sojourners)」のような左派によっても行われているにも関わらず、現時点で保守プロテスタントの活動は「ニュー・クリスチャン・ライト (the New Christian Right)」等の台頭により、頑迷な反動的ファンダメンタリズムとはほぼ同一視されていると言えよう。

教会規模の大きさと共に、イギリスとは異なる様々な問題を抱え込んだアメリカ

に関して、デイヴィッド・ウェルズは、現在の福音主義を「中心がぼやけてきたゆえに定義しがたい」運動と述べる。また、アメリカの福音主義は、「奇妙でエキセントリックなメンバーをかかえるにもかかわらずひとつの家族のままで残っている拡大家族のようなもの」とも言う。ガブリエル・フラックルによれば五つ、ロバート・ウェバーによれば十四の違ったタイプに分けられるという第二次大戦後のアメリカ福音主義をウェルズ自身は「告白的福音主義 (confessional evangelicalism)」、 「超告白的福音主義 (transconfessional evangelicalism)」、 「カリスマ的福音主義 (charismatic evangelicalism)」の3つに分類する。「告白的福音主義」は1940年代から1970年代聖書の真理の探究を求める超教派的動きに導かれて宗教改革の基本的信条を基に確立した。ジョン・ストット、J. I. パッカー、あるいはIVCFといったイギリスの告白的福音主義の流れにも助けられて活気づいたアメリカ福音主義の運動は、しかしながら、1970年代、急速に、経営手腕を持つ宗教企業家達により組織化されていく。かつてハロルド・オッケンガが「ネオ・エヴァンジェリカルズ」と名付けた神学者や聖書学者の活躍、『クリスチャニティ・トゥデイ』誌を中心に繰り広げられたファンダメンタリズムからの離脱運動としての福音主義は、1970年代以降、テレヴァンジェリストやマーケティングの手腕にたけた宗教企業家に福音主義の主導権を渡してしまうことになる。こうして台頭してきた動きをウェルズは「超告白的福音主義」と呼ぶ<sup>100</sup>。

1966年のベルリンでの会議を皮切りに1974年のローザンヌ会議を経て、世界的な影響力を与えてきたアメリカの福音主義は、本国においてはかつての「告白的福音主義」で重要視された聖書の真理の基盤を失いつつあるという。ローザンヌ精神を継承する形で開かれたはずの1989年のマニラ会議でめだつたのは、実践的アメリカ版宗教企業家の「超告白的福音主義」と「カリスマ的福音主義」の台頭であるとウェルズは語る。ローザンヌを指導した「告白的」流れは、もはや、福音主義の中心からは離れたと、ピューリタンの「エレミヤの嘆き」にも似た調子でウェルズは悲観的観察を述べる。福音主義は、ポストモダンの多様化の中で、ますます定義が困難になっているのが現状だと言えよう。

以上、現在第一線で活躍している英語圏の福音主義研究者達の論文を収めた本書はこのテーマで出版された研究書の中では際立って重要な一冊であるが、いくつかの問題点も見受けられる。編者自ら反省点として述べていることでもあるが、本書には残念なことに、女性あるいはアングロ・アメリカにおける人種的少数派と福音主義運動との関係についての論文が全く収められていない。近年の歴史学で、特に社会史、文化史の研究手法導入により歴史の再記述の努力がなされている現状を顧みる時、こうしたテーマの論文が全く収められていないのは大変残念である。また、アングロ・アメリカの福音主義を主眼にしているためであろうが、大陸ヨーロッパのプロテスタンティズムとの関係についての研究もさほど顧みられていないし、19世紀以降の非英語

圏における海外伝道と福音主義の世界的な拡大の歴史についての研究はアフリカに関する一論文しか収められていない。こうした点からは、本書は福音主義の歴史の全体像を把握するには決して包括的な研究書とは言い難い。しかしながら、環大西洋地域は、歴史的に福音主義の中心となってきた場所でもあり、運動のルーツを探る研究のためには様々な手がかりを提供してくれる大変重要な論文集だと言えよう。福音主義が世界化した観のある現在は、ポストコロニアルな視点からの研究も待たれる。

#### 注

- 1) David W. Bebbington, *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s* (London: Unwin Hyman, 1989), 2-17.
- 2) *The Works of Janathan Edwards*, vol. 4: *The Great Awakening*, ed. C. C. Goen (New Haven: Yale University Press, 1972), 193.
- 3) John Walsh, "Methodism" and the Origins of English-Speaking Evangelicalism," 19-37.
- 4) Susan O'Brien, "Eighteenth-Century Publishing Networks in the First Years of Transatlantic Evangelicalism," 38-57.
- 5) Harry S. Stout, *The Divine Dramatist: George Whitefield and the Rise of Modern Evangelicalism* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991).
- 6) Harry S. Stout, "George Whitefield in Three Countries," 58-72.
- 7) David A. Currie, "Cotton Mather's Bonifacius in Britain and America," 73-89.
- 8) ジョージ・マーズデンはファンダメンタリズムを「戦闘的なまでに反モダニスト的なプロテスタント福音主義の一つの立場」と定義する(4)。19世紀前、中期にかけて生まれた米国プロテスタントの強調点の数々を絶対普遍の立場として固辞する福音主義内最右派である。聖書の字義的解釈を主張し、プリマスプレザレンのジョン・ダービーが米国よりアメリカに紹介したプレミレニアル・デイスペンセーションリズムの考えに基づいた独特の終末論を強調する。詳しくは、George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture* (New York: Oxford University Press, 1980) 参照。同著者による、*Understanding Fundamentalism and Evangelicalism* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991) もこのトピックについて詳しい。
- 9) David Bebbington, "Evangelicalism in Its Settings: The British and American Movements since 1940," 365-388.
- 10) David Wells, "On Being Evangelical: Some Theological Differences and Similarities," 389-410.